

SKIPシティ国際Dシネマ映画祭2015

長編部門『あした生きるという旅』 内田英恵監督インタビュー

——今回のドキュメンタリー作品『あした生きるという旅』は、48歳でALS（筋萎縮性側索硬化症）を発症した塚田宏さんと、その妻の公子さんが主人公。ALSにより目の動きでその意思を伝える宏さんと、夫の意思を受けとめ闘病生活を支え続ける公子さんが旅で世界をめぐり、同じ病と闘う人々と出会い、交流を深めていく姿が記録されています。まずはこのご夫妻との出会いを教えてください。



東京とロサンゼルスで映像制作を学び、帰国後に入った映像の企画・制作会社で働いて数年たったころだと思えますが、会社の上司に知人の方から“こういうご夫妻がいっしょに記録を残したい”といったような相談が来て。その上司から“興味があったら会ってみては?”と言われて、お二人のお宅にお邪魔したのが最初です。確か2007年の終わりのころだったと思います。

——初の顔合わせのときはどんな印象をもたれましたか？

難病にかかりながら、宏さんも公子さんもまったくといっていいほど下を向いていない。それが家全体にも溢れていて、すごくポジティブなパワーを感じました。いま振り返ると、その瞬間になにかお二人の人間性に魅了されていた気がします。それで少ししてから、こういう形で取材をさせてくれませんかとか塚田さんご夫妻に打診したら、ご了承をいただけて、まずは短編を作ろうといった流れになっていきました。

——今回の作品の前段として短編『動かない体で生きる私の、それでも幸せな日々』（2008年制作）があると思います。この作品の内容を少し教えてください。

テーマとしては“生”があって、塚田さんが今をどう生きるのか、その瞬間、瞬間をしっかりとまずは記録しました。その上で、宏さんに文字盤を使ってお話をうかがい、その言葉を1人称のナレーションにおおして、宏さんが考えていることをシーンに合わせてつけました。そうすることで、宏さんが今何を考えて、今をどう生きているのかを伝えることを目指しました。ちなみにナレーションは原田芳雄さんです。また、短編にまとめたのは当初からの想定。『あした生きるという旅』にも登場するのですが、塚田さんご夫妻は医療系大学で講演をされていたりするので、そういう場でも医療関係者に見てもらえるものにしたいとの思いがありました。ただ、あまり教育テレビのようなまじめっぽくて硬いイメージの作品になってしまうのは、いやだというのが、塚田夫妻と私双方の合致した意見で、ALSのことをきちんと説明しつつも、あまり肩肘はらずにかつ実感できる内容になっていると思います。

——結果的に、この作品が海外の映画祭に出品されることが決まって、ご夫妻も現地に飛ぶことになり、それに内田監督も同行することになって、この作品が生まれることになりました。

『動かない体で生きる私の、それでも幸せな日々』を発表してから、今回の『あした生きるという旅』で語られている海外の映画祭が決まるまでに、2年ぐらいの時間の経過があったのですが、その間、宏さんの病気はかなり進みました。一方、私と塚田夫妻はことあるごとにお会いするような間柄になって。より信頼関係が深まり、公子さんから不安を打ち明けられたりすることもありました。そうなるともう他人ではいられない。いつからかこんな気持ちになっていました。“これは最後まで見届けたいといけない”と。宏さんから聞くべき言葉をきちんときいて記録して、何か形にして残さないといけないと思いました。また、『動かない体で生きる私の、それでも幸せな日々』の取材時、同じような症状の患者さんにお会いすると、塚田さんがいろいろなところに出かけられることに一様にびっくりされる。自分も外に出れるかもと思って、どうやったら可能になるか作品を通して知ろうとされる方がほんとうに多かったんです。だから、そういう方にどうやったら飛行機に乗れるとかがもっと詳しくわかるような作品を作れば、すごく役に立つのではないかとずっと考えていて。塚田夫妻は旅行だけではなく美術館やライブも大好きでよく出かける。ですから夫婦の行動をつぶさに見つめたら、同じ患者さんたちにとってかけがえのないテキストになるのではという気持ちもありました。そういういろいろな思いが詰まって出来たのが今回のドキュメンタリーです。



『あした生きるという旅』
監督：内田英恵 出演：塚田宏、塚田公子、塚田学
＜2014年／日本／83分／ワールド・プレミア上映＞
©Hanae Uchida

——今振り返ってみて、どんなことが思い起こされますか？

最初から宏さんは私を実の娘のように受け入れてくれて。たとえばある質問をしたとすると、“よしよし、好きなように好きなことを聞きなさい”と応じてくれた。ほんとうに若くてキャリアもない私を受け入れた上で、任せてくれた。その一方で、私が何か迷ったときはしかるべき方向へ導いていつてくれた。ずっと私を見守り続けてくれた宏さん、そして信頼してくれた公子さんに感謝します。

——今回、SKIPシティ国際Dシネマ映画祭のコンペティションに正式に選出されたときの気持ちを教えてください。

作り手としては作品をいかに多くの人に見てもらおう機会を作るかは大きな課題。今回のコンペティションの選出は、この作品を世に出す第一歩になりました。素直にうれしいです。あと、クラウドファンディングで多くの人をサポートを受けてこの作品は最終的な仕上げができました。ですからその支援してくれたみなさんにもいい報告ができました。それから、公子さんもすごく喜んでくださいました。上映当日はいらっしゃる予定ですごく楽しみにされています。

——今後のビジョンをどう描いていらっしゃいますか？

そもそもこの世界に入ろうと思ったきっかけは、映像の持つ力にすごく可能性を感じたから。興味があって足を運んだ写真展やソーシャルワーカーの方が登壇するトークショーなどで世界の社会的困窮者の現実を伝え聞くにつれ、なにか自分でも出来ることがないかと強く思いました。その中で、映像がまったく別の世界で生きる人と人をつないだり、その人に生きる希望や夢を与えるといった瞬間を何度か目にする機会があって、自分もこういうことができたらなど。ですから結果的に今回ですとドキュメンタリストと周囲からは見られると思うのですが、私自身としては映画監督といった作家になろうという意識はあまりありません。人に役立つ映像を作れたら、それでいい。たとえば私の作った映像が何かの活動報告に有効的となったら使ってもらえたらうれしい。映画やドキュメンタリーといった作品作りに執着していない。とにかく人と人をつなげて、少しでも役に立つ映像を作り出せればと思っています。自己満足かもしれないですけど。ただ、今回、塚田宏さんと公子さんというすばらしい人と出会えて、この作品が出来て、ドキュメンタリー作品の持つ可能性もすごく直に感じました。ですから、今回の体得したノウハウは本当に私にとって大きな宝物。いつくるかわからないですけど、新たな出会いがあったとき、それをきちんとキャッチできる感性をきちんと磨いておいて、いつでも作れる体制は継続して整えておきたいと思っています。